

Title	M・ M・ ポスタン 伊太利の中世英国の経済発展
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.9 (1952. 9) ,p.657(69)- 660(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19520901-0069
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520901-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を容易にする方法は、産業の配置を計畫すること、技術の獲得を容易にすること、賃金構成を計畫することである。自由放任主義は、産業の配置を、誤まつた方向に導びく。配置は、社会的利益、かつ特に諸取引間の動員を圓滑ならしめるように計畫されねばならない。新技術の獲得は困難な問題ではない。最近では、多くの政府の訓練機關が設けられるようになった。また賃金構成は、労働力が不足している方へ、よりよく労働力が流れるように計畫されねばならない。このためには、貨幣的均衡が保たれていなければならない。動員の高水準到達は長期的な仕事であり、計畫的移住によつて解決せねばならない。

第七章。企業に對しては次のような方法がとられる。能率は研究・助言・標準化によつて向上する。イギリスでは、このようなことをするものとして Development Councils がある。また、能率は全労働者の矜持と協同とを仕事の中に導入することによつて向上する。政府は、労働者の經營参加及び賃金契約の新方式を國有會社で實驗して、各企業に教えることができよう。また、企業の荒廢的な競争はよくないが、資源の自由な流動を妨げる獨占的行爲もよくない。大規模生産の經濟にもとづく獨占あるいは、特殊な理由にもとづくと思われる一時的獨占は、價格・利潤・販賣條件について統制されるべきである。

第八章。産業の國有化は計畫にとつて本質的なものではない。國有は計畫目的を達成するための手段である。そこで、國

有が實施されるときにはその理由が明らかにされねばならない。國有は獨占の一形態である。産業の部分的國有は、私的企業の阻止的なものとしてまた、實驗的なものとして有用であるが、完全な國有は獨占的であることが望ましい所でのみ適用されよう。そして獨占は、能率が、産業を單一統制下において方が増進する所で創られるのである。だから重要な獨占は、國家が作つたか否かにかかわらず國有化されるべきである。また、産業の公共性をもつた部分は、できる限り分散しなければいけない。一つの公共企業より、數公社の方がよいのである。そして我々が産業を國有化したり、獨占を作るときには、できる限り、統制の大きな機構を作つた方がよい。これは、議會ではできないから次のようなものを作るとよいだろう。例えば、價格に對する一般的統制の tribunal や、消費者の利益をはかる消費者議會や、労働仲裁機關など。

第九章。この著書でも計畫の第一段階は、消費選擇の自由を民主主義社會では守ることにある。そこで年々の中心の表は、來るべき年の國民所得を評價し、消費・投資・公支出の分配を案ずることである。そして消費の變動というものに充分な留意がなされねばならない。次に調整がされ、目標が確定する。この目標は豫算の終局的割當を決定するので重要である。目標達成不足は勿論よくないが、達成超過もまた、目標の悪い證據である。勿論完全な目標は不可能であつて、大切なことは、計畫が彈力的であることである。その點市場による目標遂行が公衆

論文紹介

M. M. ポスタン
『伊太利と中世英國の經濟發展』
(M. M. Postan, "Italy and the Economic Development of England in the Middle Ages,"
Journal of Economic History, Vol. II, No. 4,
Fall 1951, pp. 339-346.)

いかなる政府も完全ではあり得ない。しかし、イギリス政府の失敗は、過去の労働黨の歴史から當然であつた。従來、社會主義者にとつて、計畫とは、原理的に所得の分配平等化及び産業の國有化を意味してきた。そして、それ故に、社會主義計畫は、貨幣・投資・外國貿易をどうしていいのが判らなかつたのである。今や、労働黨の計畫者は重要な教訓を得たであらう。國有化とか、所得の分配とかは計畫のほんの一小部分にすぎないのであり、それにこだわつてはならないのだと。
以上がルイス教授の所論なのだが、我々はコールと類似の點を見出すのに困難ではないであらう。その平凡なありふれた論旨は、直ちにそのまま平凡なものではない。そこには資本主義の最盛を誇つたイギリスの、不斷の前進對策が映じているのである。

米國の經濟史學會の第十一回大會は昨年九月七・八兩日にプリンストン大學で開催された。共通題目は「他地域の經濟發展における主導國民の役割」であつて、ポスタン教授が「イタリ」と中世英國の經濟發展」と題し、次のような發表を行なつた。通説に依れば「中世初期の數世紀においてブリテンは謂わばヨーロッパの縁邊の上にあつた。アングロ・サクソン民族の征服はローマ文化の一切の名残を跡形もなく拂拭し、その後數世紀間の生活はライン河以西のヨーロッパの他の如何なる地域におけるよりも更に簡素であつた。都市の生成と發展とは遅れ、外部世界との商業的接觸は非常に稀であつた。この國は元々富裕であつたが、その有望な富はこの國の農業時にその羊毛にあつた。諸外國人が大量の英國産羊毛を買附け出して始めて英國は然るべき時期にこの國を西洋世界において主導的な經濟勢力たらしめた發展へ向ふことが出來た」が、「この發展は主とし

てイタリイ人に依つて惹起された」のであり、「イタリイ人の箴言や實例が土着商人に商業や金融の手續を教へ」、「羊毛を買付けるために英國へ来たイタリイ人及び彼等の貸付や投資が經濟生活に對し有力な刺戟を與へた」ためとはいへ、とにかく「國王エドワード三世がバルディとペルツツイの兩銀行に對しその龐大な債務を違約し、かくて英國におけるイタリイ商館の必然的衰退が土着商人に對し商業や金融の殆んどすべての分野においてイタリイ人に代るべき機會を與へた」第十四世紀の半頃に至る迄、イタリイ人が英國經濟の發展過程において重要な地位を占めてゐたといふのである。

なるほど「英國を含め、西ヨーロッパにおける他の諸國と比較し、イタリイは富裕であつた。その商工業技術は頗る進歩してゐた。その商人は經驗に富み又資本を大量に供給した。彼等はライン河以西のヨーロッパのあらゆる地域において貿易してゐるのが見られ、又彼等が居住したり貿易したりした如何なる國もその事業や投資から、そして特にかなり高度なその營業の技術や能率の實例から利益を受けないといふことはなかつた」が、英國中世の經濟發展におけるイタリイ人の役割を意外に重視したかかる通説は然し再吟味されなければならないであらう。第一、假令イタリイ人が中世において他國を指導する完全な能力を持つてゐたとしても、その及ぼす影響が相當に大きくしかも繼續的でない限り十分な効果が望めないといへば、果してイタリイ人の存在が英國中世の經濟發展にとつて決定的要因となつたかどうかは疑はしいし、また英國中世の經濟發展が、事實において經濟成長であるにも拘はらず、内的發展を度外視してイタリイ人の介入といふ外的影響にのみ經濟進歩の重大な契機を求めようとするのが不自然なのである。寧ろ「勞働力の一層大量の供給」、「改良された農工技術」や「資本の繼續的投下」が、「第十世紀から第十四世紀半に至る間の英國における大規模な農業發展」、「同期における羊毛生産の發達」や「第十四世紀末から第十五世紀に互る毛織物生産の發展」を可能ならしめた原因のすべてであつて、英國中世の經濟發展に對するイタリイの寄與如何は「單純でしかも基本的な」これ等諸原因に及ぼしたイタリイ人の影響の有無を究明した上で評價するべき問題であらう。

となつたかどうかは疑はしいし、また英國中世の經濟發展が、事實において經濟成長であるにも拘はらず、内的發展を度外視してイタリイ人の介入といふ外的影響にのみ經濟進歩の重大な契機を求めようとするのが不自然なのである。寧ろ「勞働力の一層大量の供給」、「改良された農工技術」や「資本の繼續的投下」が、「第十世紀から第十四世紀半に至る間の英國における大規模な農業發展」、「同期における羊毛生産の發達」や「第十四世紀末から第十五世紀に互る毛織物生産の發展」を可能ならしめた原因のすべてであつて、英國中世の經濟發展に對するイタリイの寄與如何は「單純でしかも基本的な」これ等諸原因に及ぼしたイタリイ人の影響の有無を究明した上で評價するべき問題であらう。

來住したイタリイ人が勞働力の給源となる程多數でなかつたことはいふまでもない。然らばこの新來者の技術面における貢獻には一體如何なるものがあつたであらうか。商業技術に對する影響に關連して通説は「英國人が屢々しかも忠實に眞似たイタリイ人の唯一の範例は事務手續のそれであつた」と述べてゐる。即ち「賣つたりイタリイ人から買つたりし、外國通貨や信用でイタリイ人と取引した英國商人は營業慣習に依つて書類を整理する正確でしかも廣く知られてゐた方法をイタリイ人から學んだ。海外において外國通貨で支拂ふことを指圖したイタリイの手形の一つトラツタが英國の爲替手形の模範となつた」ほか「海上貸借の契約が第十四・五世紀にやつ

と始まる英國海上保險の契約の原型となつた」し、「英國の備船契約書が國際慣行に従つたこと、そして今度は國際慣行が全く例外もなくイタリイの原型に則つて出來てゐた」といふのであるが、「大抵は手續の問題であつて、機能の問題ではなかつた」から、「かかる模倣は過大評價されてはならない」であらう。

しかも「トラツタの標準形式が採用される迄か以前に英國商人は海外において外國通貨で支拂ふことを指圖した手形を振出し「てゐた」し、又「英國商人は海外における彼等の代理人即ちイタリイ人代理商と屢々共同したが、イタリイ人の共同契約の形式を踏襲したり術語を採用したりすることはなかつた」のであつて、寧ろ「中世を通じて共同者間の規約は英法においては終始恰も召使對主人・會計係對主人のそれであつたかの如く扱はれ、謂ゆる支拂規定に依つて訴へることが出來た」から「この法理はイタリイの共同のそれと餘りにも違つてゐた」のであつた。

イタリイ人の影響が商業手續面においては何等認められぬとしても、果して農業技術に對する貢獻については如何なることとがいはれるであらうか。なるほど「フランドル人が大舉來住したため、治水に關するフランドル人の知識が容易に英國東部の諸州に滲透した」、「水車技術におけるフランドルやドイツの進歩を英國の大工が見習つた」、「葡萄や大抵の野菜の栽培がフランスから英國へ紹介された」、「醃を鹽漬にして貯へたりホップで麥酒を醸造したりする方法がヨーロッパの他の地域から傳はつた」が、これ等農業においては比較的重要なでない諸面に

對しイタリイ人以外の外國人が與へた影響を除けば「不規則な耕作から二圃制へ、そして後に三圃制への轉換、相當に重い農具やかなり大型な犁の使用、牧羊や毛質における改良、これ等はすべて謂ゆる自生的な技術——英國の人々が自然との闘争の過程において獲得した技術——に負つた」のであつて、假令英國農業における技術發展が「北歐諸國民の全部に共通する或る種のものであつた」とはいへ、農業生活の主要部分に對してはイタリイ人は無論のこと如何なる外國人も影響を與へてゐなかつたと見るべきであらう。

中世英國に特徴的な毛織物生産についても事情は全く同様であつた。なるほど「第十四・五世紀に起つた毛織物生産の大發展においてフランドルの技術や範例が役割を演じたかも知れない」が、「嘗て考へられてゐた程大きな役割ではなかつた」し、假令「若干のフランドル移民が招致され、又かなり多くの者が無斷で入つて來た」場合においても、「毛織物生産の主要部分は英國人の手中にあり」、「第十六世紀半に至る迄英國は從來通りの型の毛織物——南部では大幅上等羅紗や縞織、東部ではカーシ織や毛糸——を生産し續けてゐた」のであつた。

「造船や航海に關する英國の技術はその起源において一層實際的であつた」。然しこの場合においてもイタリイ人の影響は全くなく、イタリイ以外の諸國からの技術傳播が寧ろ重要な意義を持つてゐた。例へば「第十五世紀の後半に至る迄英國の水夫や商人が操縦した商船の型は北方式のマルク船やヨック船で

あつた」し、「頻りに通つた航路、恩恵を蒙つた航海の方法を彼等は近接する他の海國オランダ、スカンジナビヤ、ドイツに負つてゐた」のであつて、イタリー式のガリイ船やキアラック船は建造されなかつたし、イタリー製の地圖が使用されたといふ證據はなかつたのである。

以上に依つて知られる通りイタリー人は技術の如何なる進歩に對しても貢獻するところがなかつた。然らば一般に「英國におけるイタリー人の活躍の主たるもの」といはれて來た投資面に對する寄與を實際に如何に見るべきであらうか。

イタリー人が英國において扱つた資本が如何にして調達されたかといふに「決して全部ではなくともあらましが、かなりの部分が又時には大部分が」イタリー人に屬し、イタリーから輸入された「資本であつて、假令「第十三・四世紀を通じてイタリーの大商館や大銀行は非常に活氣があつた、第十三世紀末にはリカルディやフレスコバルディ、第十四世紀初にはバルディやベルッソイ、第十四世紀末や第十五世紀にはメディチの各商會が英國の財政特に政府財政に深く喰込んでゐた、バルディやベルッソイの各商館に對しエドワード三世の負つた借金が第十四世紀の最初の二十五年間においてはこの英國王の毎年の戦費の最高に等しい二十五萬鎊を屢々遙かに凌駕した」場合にあつても、財源はイタリー人がこの國において受取つた富裕な人々からの預金でも又イタリー人がこの國において徴収を委任されてゐた教皇税の一部でもなく、正にイタリー本國にあつたの

ではあるが、然し投資に關連して「層重要な問題は寧ろ膨大なこの資本が果して實際に生産面に振向けられてゐたかどうかといふ點であらう。尤も現實においては「貸付の大部分が國王の戦費を調達するために使用され、かくして國王に前貸された基金の若干は海外における國王の官吏、軍の會計係やフランスにゐる守備隊に直接支拂はれた」のであつて、「これ等の前貸と比較すれば、國王の臣下に對するイタリー人の貸付は非常に少なかつた」し、稀に「第十四・五世紀を通じて我々は貴族や修道院に對し金錢を貸してゐるイタリー人を見出す」が、假令「イタリー人の貸付が羊毛の將來の生長を見込んだ前拂の形を採つた」り、又「前拂の若干が羊群の増加や牧場の擴張に投下された」りしたとしても、とにかく「イタリー人の貸付に依る羊毛生産における大發展に關しては何の證據も何の事實もなかつた」から、従つて「若干のイタリー商人の資本が英國における生産的投資にその道を見出した」場合にあつても「全體としてその活動は餘りにも微弱であり又餘りにも不規則であつて經濟發展に對しかなりの變化を及ぼすことが出来なかつた」と見るべきであらう。

技術面に對すると同様に、投資面におけるイタリー人の貢獻に關しても積極的な意義は附し難く、従つてイタリー人が英國中世の經濟發展において演じた役割は通説に反し「全く二次的でしかも餘り重要ではなくなる」といはざるを得ないのである。(渡邊國廣)

編集後記

獨立して最初の總選舉が行われようとしている。占領下では何處までが日本の生地の姿か判定が困難であつたけれども、今度はそれが隠しようもなくはつきりと現われるわけである。終戦直後、四等國だつたはずの日本が獨立直後急に東亞の指導者に成りあがつたり、神の如く寛容だつたワシントン政府が露骨な帝國主義者になつたり、新聞紙上の評價は變轉極まりないけれど、我國の眞の状態が如何なるものであるか一人々々の腦裡には可成はつきりした像が浮び上つてゐることであらう。政治的な問題解決の責任は誰もがその一端を擔ねねばならぬものであるが、その一方我々は經濟學研究という職業を通じて國情を改善する責任を有する。國情に即した政策への進言を可能ならしめるような理論の樹立もその一つであり、また現在ハーバート大學、シカゴ大學あるいはオスロ經濟研究所が世界の學界に果してゐる役割を本塾經濟學部も果しうするようにすることがまた一つである。近時その起源が何れであるにせよ愛國主義的科學の必要が叫ばれはじめたことは、再び高天ヶ原經濟學の出現を促さぬでもないとの不安を感じさせる。我々は祖國愛、民族主義を絶叫する科學が如何に派手なものであるにせよ、社會生活を眞に改善する科學ではないことを再び強く自らに言い聽かせて、恐れることなく地味な研究に沈潜する勇氣を蓄えぬばならない。(辻村江太郎)

昭和二十七年八月二十五日印刷
 昭和二十七年九月一日發行

第四十五卷 定價 七拾圓
 第九號 送料 四圓

編輯者 高村象平
 發行所 東京都港區芝三田慶大經濟學部内
 印刷所 圖書印刷株式會社 川口芳太郎

豫約購讀料
 一年分 金八四〇圓(送料共)
 半ケ年分 金四二〇圓

發行所 東京都港區芝三田二丁目
 慶應義塾大學經濟學部研究室内
 慶應義塾經濟學會